

グループ学習のポイント

グループ学習のポイント（高学年）

—子どもたちに「まかせる・委ねる」ためには、授業までの準備が大切—

佐々木盛文（大阪・河内長野市立千代田小学校）

高学年だからグループ学習が上手にいく！
というところから上手にいきません。いく
つかの手立てがなかったり、教える中身がし
っかりしていなかったりすると子どもたちは
好き勝手に動いてしまう事もよくあります。

1. 高学年になると逆にやりにくい ～できないことはダメじゃない～

体育で異質協同のグループ学習を取り組む
ことの意義として「できる・できない」がは
っきり見えることだと思います。算数では、
できない時にはだまってじっとしていれば授
業が終わってしまう、ということもあると思
います（授業者としては本来、よろしくない
のですが）。体育では、できないことが自分
にも、友達にも、先生にもはっきりと見えて
しまいます。個別の学習では、できないこと
がクラス全体に共有されないですみます。で
きない友だち同士の中ですまされます。しか
し子どもたちの思いとしては「ぼくはできな
いところでやっているからダメなんだ」「わ
たしは〇〇さんと比べて下手なんだ」という
マイナスの気持ちを授業後に持つことになり
ます。

この「できないこと」をどのように捉えさ
せて、グループで学習にのぞめるかがグル
ープ学習を行う上で1つ目の壁だと思います。

ここ最近の傾向として「できないから何も
しない」「みんながいるからできない」と訴え
る子どもが少なくありません。できないこと

に対してのはずかしさや初めてやることに対
しても恐怖心が大きい子どもがいることも授
業を作っていく上で考えておきたい事です。

子どもの実態にあったグループ学習を

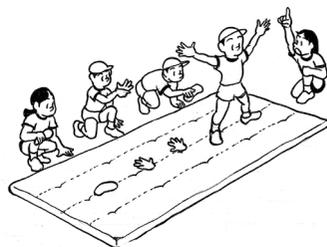
2. グループ学習の経験 ～個人でやる学習からの転換～

高学年になるとこれまでの体育の授業のイ
メージが固まっています。グループで学習し
てきた経験がある場合は少なく、「自分の課
題（多くの場合は場の選択）を一生けん命に
自分で取り組む」ような授業を経験している
場合が多いようです。

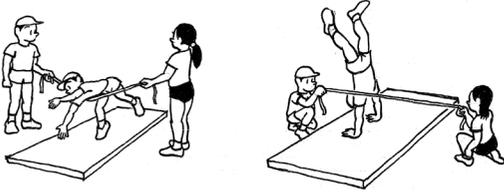
ですから初期の段階から、練習計画を立て
たり、課題を見つけたりするような学習内容
を設定しないで、チェック表に◎○△をつけ
るような簡単な学習から仕組んでいきます。

また、自分の技を自分で見ることはビデオ
などを使わない限りできません。しかし、グ
ループの友だちならすぐに見ることが出来ま
す。自分のでき具合を知るために友だちの力
をかりるのです。グループで見合う必要性を
感じることができます。

側転の学習では
「側転診断」を行
います。足や手を
マットのどこに付
けているか手足型
をつかって調べ
ます。

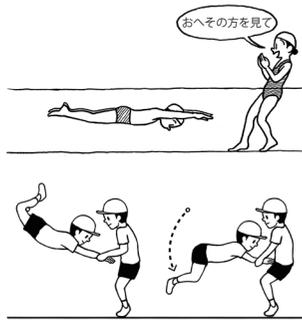


側転診断と側転の修正



高学年では補助する力がついてきます。補助の仕方やポイントははじめにしっかり教えておく必要がありますが、わかったら上手にできるようになります。

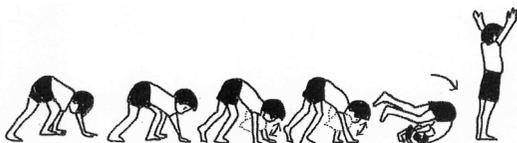
側転の練習や水泳での声かけ、手を持つての練習などは簡単でわかりやすく、よりグループで練習している実感を味わうことができます。



技のチェックや補助が友だちの必要性を感じさせてくれる

3. 簡単な技でもポイントがある ～なんで前転ができるの？～

できないことへのはずかしさが大きい子どもたちに対して、「できるか」「できないか」で評価をするような授業ではそのような子どもたちは乗ってきません。できている子どもたちもできてしまったらもうやるのがなくなってしまう。低学年では前転を教えるために「くまさんこんにちは」のお話マットを行います。高学年ではあえて「なぜ前転ができるのですか？」という発問をすることがあります。子どもたちはそんなこと考えたこともありません。考え始めると「体をまる



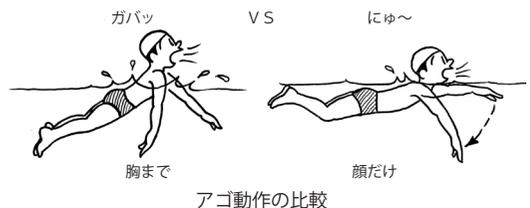
くまさんが やってきて こんにちは こんにちは さようなら はいポーズ

めているから」「おへそを見ているから」などの答えを導き出します。

「おへそを見て体をまるめること」「頭より腰が上にあること（逆さ）」「手より肩が前に出たら前転が始まること」をていねいに教えると「なるほど」という反応をしてくれます。どんな技でもできるためのポイントがあって、苦手な人はどこかのポイントでつまづいているからできないのだ、という見方ができるようになっていきます。

このように「わかる」がめあてになるような授業を仕組みます。習熟練習の時間以外は基本的に「まっすぐ側転をするための方法を探ろう」や「あまり沈まない息つぎの方法を見つけよう」など「分かる」が中心になる授業にしていきたいです。

「わかる」内容を中心にする事で「どうやったらできるのか」がわかり、苦手な子どもは「やってみよう」という意欲が出てきます。得意な子どもは自分のできている理由がわかり、さらに技の質が高まります。ドル平の学習で、息つぎ時に顔を水面から上げるとき、胸まで出ている場合とあごまでしか出ない場合を泳ぎ比べることで、「なるほど」と気づくことができます。胸まで上げていても泳げることには変わりはないのですが、あごまでしか上げないことで明らかに沈み込みが少ないコントロールした泳ぎにつながっていきます。また、泳ぎを比べるときに苦手な友だちの泳ぎが近くですぐに見られることは「わかる」ためにはとっても重要です。苦手な友だちは分かるためには必要な人になって



きます。

「わかる」を追求する発問をする

4. 技術認識を高めることが重要 ～〇〇さんへのアドバイスから～

「わかる」を大切にするということは子どもたち自身の技術認識が高まるということです。プレーから認識が高まったと感じることもたまにあります。毎回そのようなことを指導者や友だち同士が感じることはなかなかありません。そこで毎時間の感想文が大切になってきます。

感想文の書かせ方は様々ですが、その時間のめあてについて、グループの友だちについては書かせたいです。感想文用紙にその時間で「分かったことや考えたこと」と「友だちへのアドバイス」の欄をあらかじめ作っておくような用紙を使う場合もあります。また、感想を書くときに「△△△については書きましょう」という指定をする場合もあります。

今日、ドルクロをやりました。私は、25m およげたけど、〇〇さんはうまくできなかったの、アドバイスをしました。そのアドバイスは「クロールをするときは、顔を横にして」ということです。そして何回もアドバイスをしていたら、さいごにはけっこうおよげていて、私は人のことだけど、自分のことのようにうれしかったです。

書いた感想文はグループ内で読みあったり、通信などで紹介したり、授業のはじめに教師が読んであげたりします。技術認識が高まっていることを子どもたちに自覚させることが必要です。友だちの感想文を紹介することで文章を書くことが苦手な子どもにとって

は、技術についてこんな風に感想をかいたらいいんだとわかって徐々に書けるようになってきます。また、感想文を書くことによって自分たちが考えたことを自覚することができるようになります。

技術認識の高まりを紹介する

5. 失敗させないためのスモールステップ～できることを積み重ねる～

できない」ことへの抵抗が大きい子どもたちにとっては、できる見通しを持つことが重要だと思います。これまでの経験で「できない」ことばかりさせられてきたから、「できる」経験＝成功体験が必要です。

できるための道すじを明らかにして授業で分からせることができるかはグループ学習成功の大きなカギです。スモールステップをていねいに行うことは、できない友だちができる友だちが変わっていく様子を見られる手立てでもあります。

「できる」ためのスモールステップを明確にして、できた体験を積み重ねる

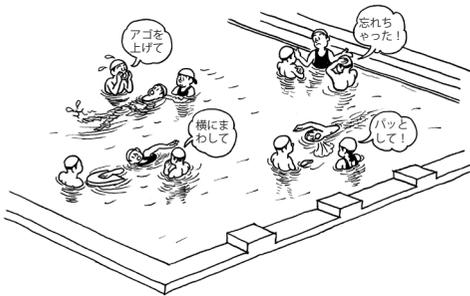
6. グループでの成功体験を軸に ～おれたちがうまくした!!～

「自分が」できたという実感も大切にしたいのですが、「自分たちの力」でできさせたという実感を持たせることがグループ学習をより活発にするための大切なカギです。グループの質が高まったと感じる瞬間です。

今日のマットはめっちゃがんばりました。〇〇さんはなかなか上手にできなかったけど「手はここについたらいいよ」とか「最後はこけずにふんばるねん」とかみんながアドバイスして何回か練習したらだんだん上手になっていきました。

この班はみんなで声をかけあってしっかり練習できているのでいいと思います。

また授業中でも上手に教え合っている場面を見つけるようにします。わかりやすいアドバイスをしていたり、上手に補助したりしている場面を取り出してクラス全体に紹介します。そのことで自分たちのグループでも同じように教え合おうという気持ちが膨らんでいきます。



今の子どもたちは前述したようにすんなりと学び合うことができません。少しずつ経験していくことで教え合い、学び合えるようになります。ちなみに、教え合いと学び合いの違いは「苦手な子どもからの要求がある」のが学び合いだそうです。得意な子どもから「どうしたらいいかわからない」と悲鳴があがってきたら学び合いが始まっている証拠です。

自分たちが上手くさせたことや教え合いの過程を取り出してクラス全体に広げる

7. 委ねることですさらに質が高まる ～練習計画を立てる～

グループ学習を経験してくるとグループで考えることを増やしていきます。発問をふやしたり、習熟練習のときの計画を立てたりします。練習計画を立てさせる前提として、技術についてある程度わかっていること、グループの友だちのつまづきがわかっていること、が挙げられます。少しの時間から始めて

最終的には授業のほとんどの時間をグループに委ねられたら良いかと思います。

子どもたちに委ねて見守る

8. 実はとっても難しい球技のグループ学習～相手によって練習が活かない場合がある～

これまで水泳や器械運動の例を出してきましたが、グループ学習をしやすい教材だからです。一方、球技のグループ学習はとても難しいです。というのは、練習で上手くなってその通り動いても守りがさらに上手くなっていたら活かない時があるからです。

今日、バスケットをしました。できるだけシュートポイントにいてパスをもらおうとしているけど、なかなかパスがきません。もっとパスをしてほしいです。

このような感想文からなぜパスがこないのかを探る必要があります。ゲーム分析をしてもなぜ？を考える必要が出てきます。この場合は「シュートポイントにいる人に守りのマークがついていたから」でした。苦手な人の感想から、パスが出せなかった友だちの声をさらに聞いていったり、出させたりする必要があります。

またあるグループが上手くいったプレーを◇◇班作戦としてクラス全体に紹介することでより自分たちのグループの力を自覚することにもつながります。

このようにそれぞれのグループの感想やプレーをていねいに見て、交通整理をしていくことが必要です。

